

令和6年度 第2回学校運営協議会 記録

1 日時

令和6年11月28日(木) 10:00～11:30

2 場所

本校会議室

3 参加者

(1) 学校運営協議会委員 9名

A氏(学識経験者)

B氏(教育関係有識者)

C氏(福祉関係者)

D氏(PTA関係者)

E氏(企業関係者)

F氏(地域関係者)

G氏(福祉関係者)

H氏(行政関係者)

I氏(本校職員)

(2) 本校職員 8名

校長 副校長(中・高)、事務長、総括教務主任、学部主事(小・中・高)

*副校長(小)は欠席

4 内容

(1) 開会のことば

(2) 校長あいさつ

本日は、ご多用の中、第2回学校運営協議会にご出席いただき、誠にありがとうございます。過日は、全校で取り組む行事「ひがしの日」が開催され、今年度は全部で406名の来場があった。昨年度の335名と比較すると、今年度は1.2倍の来校者だった。多数の方が本校においでいただき、大盛況のうちに終えることができた。学校運営協議会の委員の皆様方の中にも、お時間をつくって来校いただいた方もいらっしゃった。この場をお借りして御礼申し上げます。

「ひがしの日」は、コロナ明け本格開催になって2年目を迎えている。日頃の活動の成果を皆さんに見ていただくという趣旨のもと、小中高それぞれの活動の様子をお見せすることができた。「楽しかった」、「子供たちの頑張りをたくさん見られた」

というご意見を多数頂戴した。

まだまだ行事については改善していかなければならない部分も多々あると感じているが、本校の教育活動の大きな柱となる行事として、多くの人に認知いただいていると肌で感じている。次年度に向けてしっかり取り組んで参りたい。

さて、本日は、2回目の学校運営協議会となる。今年度取り組んできた地域連携について前半の学習活動を振り返る協議内容になっている。地域の捉えと、学部ごとの取り組みに向けた基本コンセプトがどのように展開されたのかを振り返りながら、ご意見やご提案等をお聞きし、熟議という形で練り上げていければと思っている。限られた時間にはなるが、本日はどうぞよろしく願いいたします。

(3) 議事

ア 協議（進行：会長）

(ア) 令和6年度地域連携について

I氏：これまでの地域連携の流れも含めて説明する。まず、地域連携を学校経営において進めていくにあたっては、今年度、校内組織で従来からある復興教育委員会の中において進めていくことにした。岩手版キャリア教育の視点のもとに、本県でずっと進めている復興教育と関連付け、復興教育の中にある3つのキーワード「いきる」、「かかわる」、「そなえる」の中から、「かかわる」の部分について、地域連携の視点で取り組んでいくこととし、今年度スタートした。地域をどのような枠組みで捉えるのかについては、昨年度と同様に児童生徒が広域な範囲から通学しているということと、将来の社会とのつながりを考え、まずは身近な地域である「ローカルコミュニティ」、次に盛岡圏域あるいは盛岡広域圏をイメージした「エリアコミュニティ」、最後に、将来、社会的に広がりがあるイメージでの「ソーシャルコミュニティ」と3つの枠組みを考えた。小学部、中学部、高等部、各学部の発達段階を踏まえて、復興教育の「かかわる」の視点から、小学部は「地域を知る」、中学部は「地域とつながる」、高等部は「地域に貢献する」をそれぞれの基本コンセプトとし、学習活動を展開して方向性を校内で確認した。1回目の学校運営協議会では、前期の学習活動が、先ほどの3つのコミュニティのどこに関わっている学習内容なのか、一覧表にしてお示しした。2回目の本日は、前期の学習内容の実施状況と振り返りを資料にまとめているので、実施内容を見ていただきながら、小学部の「地域を知る」、中学部の「地域とつながる」、高等部の「地域に貢献する」がどのように展開されているのかを見ていただきたい。その上で、お気づきの点や、疑問点など、ご意見をいただきながら、改善に向けた取り組みに変えていきたい。先ほどの、「地域を知る」、「地域とつながる」、「地域に貢献する」という言葉は、本日の資料の中には表記としては出ていないが、小中高、各学部のコンセプトとして捉えて見ていただきたい。（全体の説明は以上）

- ・ 前期活動報告
資料 p. 2 のとおり（各学部主事が説明）
- ・ 後期活動計画
資料 p. 3 のとおり（各学部主事が説明）

A氏：活動自体は活発に、いろいろなところで様々な活動をしているが、これらをどういう観点で、あるいは規準で評価をしているか。例えば活動に関わった先生方で振り返りをするとか、高等部であれば生徒と一緒に「今回の活動はどうだったか」の振り返りをするとか、どのように評価をしているのか。

小学部主事：身近な地域の活動の、例えば「散策」では、1年生であれば、前期は学校に慣れることで精一杯なので、「外に遊びに行く」、「歩きに行く」以前のところからスタートしているが、だんだん学校に慣れてきたところで、「ちょっと外を歩いてみよう」ということになる。歩いてみたところで、「たくさん歩けるようになったね」という評価をする。学年が上がると、「てしろもりの丘」の遊具を使わせてもらう。そこで、「てしろもりの丘」の利用者さんと会ったときに挨拶をする。地域の方々への挨拶を学ぶ機会になっている。「挨拶できてよかったね」と声を掛け、即時評価し、挨拶を学びに変えている。距離を長く歩けるようになると、ファミリーマートなどへの買い物学習に出掛ける。そこでは店員さんとのコミュニケーションも学ぶ。品物選びや支払いに時間がかかることが多いが、店の協力を得ながら学習を実施している。他者との関わりというところでは、「会計お願いします」という支払いから、品物を受け取ってお礼をするという練習をしてから臨んでいる。買い物スキルを学んできたねというところを、事後学習として児童と一緒に振り返り確認している。児童本人のことはもちろん、クラスメイトの発言や行動の様子について確認し、よかった点を全体で共有し評価している。

中学部主事：地域の学習で、インタビューを実施した。事前にインタビューの内容を自分で考えたり、先生との会話の中からヒントを得て自分で調べたりしている。例えば、りんごの学習であれば、りんごの種類などを事前に調べ、当日実際に見て種類が分かったなど、その都度確認して評価につなげている。事後学習では、生徒と一緒に振り返りをし、できたことを確認して褒めたりするなどしている。校外学習では、「校外学習のしおり」に目標を記載している。事後学習の場面で、各項目に自分で○を付ける時間を設けている。教員からの評価の欄もある。

高等部主事：様々な活動をしているが、各活動の振り返りとまとめを大事にしている。ワークシートに書いてまとめ、ファイルに綴っている。活動の様子を掲示して

いる。最近では「ひがしの日」の展示スペースに掲示した。廊下にも活動の様子は随時模造紙に書いて貼り、成果の発信をしている。学校見学等に来た保護者やお客様にも掲示物を見てもらい説明をしている。「ひがしの日」の例だと、各班の売上金額をお互いに発表している。「合計金額は〇〇円」と出した上で、「これはハンバーガー〇個分ですよ」などと添えて、この売上を次の昼食会に使うことを伝え、メニュー選びも生徒にさせている。実習に関わることについては、実習日誌を活用している。日々自分が思っていることやこれからが頑張りたいことなどを日誌にまとめている。これに教員がコメントを書いたり、事業所の方に書いてもらったりしている。自宅から事業所に通っている生徒については、保護者にもコメントを書いてももらうこともしている。事業所と学校が情報を共有しながら評価をしている。学習のまとめを取っておいて、後からまとめて発信するのではなく、その都度発信できるように心掛けている。

A氏：これらの様々な地域活動は、教育活動の位置づけで言うと、いわゆる「合わせた指導」になる。例えば生活単元学習の中だったり、小学部低学年であれば、遊びの学習だったり、いろいろな形があると思う。知的障がいの教育でここ最近言われているのは、「合わせた指導」の中で、教科ごとの目標をどれだけ意識して扱っているかということだ。校長先生は様々な研究大会の場で、文部科学省の調査官から同様の話や説明は聞いていると思う。地域を教材に児童生徒が様々な学習をしていくが、「何ができるようになったか」評価の部分を教員側がしっかりと観点をもっておくべきだ。「楽しそうに活動していてよかったね」、「いきいきしていたからよかったね」という評価で終わってしまえば、教員側としてはまずいと思う。子供たちは「地域の人といろいろな活動ができて楽しかった」、「実際に買い物が出てよかった」で良いのだが、教員側は子供たちの目標に則して、これらの活動を通して何ができるようになったのかを、しっかり評価していかなければならない。今年から地域活動が本格的に始まったわけだが、例えば小学部1年生の児童だと、これから12年間、今日の報告や計画の中にあるような地域活動を積み重ねていくことになる。12年間で何を学んだのか、何ができるようになったのか、しっかり評価をして、後から振り返ることができるように記録を残していくことが必要になる。どのように評価し残していくのかはいろいろな方法があるが、記録を残すという意味では、例えばキャリアパスポートを活用するのも一つの方法だ。これは子供たち自身による自己評価であり、いわばポートフォリオである。高等部の報告で良かったなと思ったのは、しっかりまとめや振り返りをしているところだ。「ひがしの日」で発表するなど、活動して終わりではなく、皆さんに発表する機会を設けている点が評価できる。中学部でも事後学習をしっかり行っているということだったが、子供たち自身の振り返りの時間がとても大切である。学んだことをキャリ

アパサポートなど、何らかの形でしっかり残していくことが大事ではないか。活動の内容は、写真もたくさん見せていただきよく分かった。内容はとても良いので、年度末に最後のまとめを聞かせていただくのが楽しみである。先生方へのお願いは、評価の観点と、「子供たちのものになる」活動を意識して、今後も取り組んでもらいたい。

D氏：新たな連携先は増えていくのか、ある程度固定されているのか教えてほしい。買い物学習では、今年はこの店だが、来年は別の店、のようになっているのか。地域の人に特別支援学校に通う子供たちを分かってもらおうというところに重きを置くのであれば、いろいろな相手先を考えるということになる。相手先が固定しているということであれば、いつも行っているところの方が、相手先も学校側もスムーズでしょう。どちらもメリットとデメリットがあると思うが、地域連携においては、どちらを重視しているか。

I氏：連携先は固定化していく場合もある。一方でいろいろな人と知り合っていく、きっかけを広げていくという意味では、様々な連携先を求めていくということになる。中学部・高等部と年齢が上がり、社会の入口に近くなっていくと、進路に向けての取り組みや、働く力をどう養っていくかなどという、いわば固定化した目標になっていく場合は、連携先も固定化していくことになると思う。社会体験を広げ、積み上げたいという、小学部や中学部の初期の段階では、いろいろな場所での体験が必要ということで、いろいろな場所に出掛けるとか、いろいろなものを見に行くというように、どんどん連携先を広げていくことになる。同じ場所に行く場合でも、前回と違った取り組み方で臨むというように、2つの柱がある。どちらかに偏ることなく、バランスよく取り組むことで、いろいろな実態をもつ子供たちに対応している。

高等部主事：高等部では、新たな連携先ということでは、外部の方から「作業販売会しませんか」と声を掛けていただいた例がある。黒川工業団地祭での実習製品の販売についてお声掛けいただき参加した。学校内の調整の関係で、生徒を連れての参加は難しかったが、職員が参加した。お声を掛けていただくことはとてもうれしい。特別支援学校について理解を深めてもらうことができた。

H氏：児童生徒中心に考えて提携先を模索していかなければならない。障害福祉の視点で言うと、地域の方とか、企業の方とかが、障がいのある人との関わりや接点をもつということが障がい者理解につながる。障害者差別解消法の観点もある。こちらとしては関わってほしいと思っても、関わったことがない人たちにとつ

ては、対応の仕方が分からないものだ。新しい連携先を探していくことで、障がい者理解が広がっていくと良い。

B氏：職業体験、職場体験は、中1年、2年で系統立てて実施している。中1は、地域の職場見学、中2は紫波町のオガールに宿泊しながら職場体験をしている。これらが中3での自主研修につながるという流れをつくっている。本校では今年度、郷土芸能を活用しながら、学校公開を行った。ただ踊るだけではなく、キャリア教育の視点も入れながら、1年生は「学ぶ」、2年生は「伝える」、3年生は「地域に発信する」というように系統立てながら、道徳とか特別活動などと相互単元的にカリキュラムをつくりながら行っている。事前、事中、事後の活動を大事にしている。事前は意識付けや、しっかり目標をもたせるということをしている。事中は、いよいよ本番の直前で、自分はどんな活動をしたいのか、どんなふうに踊りたいのか、決意を述べさせることをしている。事後では、学んだものはどういうものだったのか、伝えきったものはどういうものだったのかをしっかりと振り返らせることをしている。まとめを書かせるだけではなく、発表交流をしたり、相互交流をしたりしながら、さらに有用感を高めていくということを学校公開でお見せした。活動ありきではなく、活動をする中で子供たちが何を学んだのか理解し、それをどのように自身に落とし込んで次の活動につなげていくのかを大切にしてきた経緯があるので、継続していきたい。

E氏：資料を見ると、地域活動が前進していることが分かる。いろいろな評価の仕方、いろいろな見学先や研修先があり、活動が豊富である。長く学校の活動を見ているが、前向きな進化をしているという感想をもっている。いろいろな人と会話をしながら、ふれあいを広げていけば良いと思う。こちらの卒業生もうちの会社に就職している。私が彼らに最初に言うのは「特別扱いはしない。同じ人間なのだから同様に扱う。褒めるときは褒めるし、ダメな時には怒る。それでも良ければうちの会社に来なさい」と。学校の地域活動がとてもステップアップしているという感想だ。

C氏：いろいろな取り組みをしていただいているなあと感じた。報告の中にあつた「知る」「つながる」「貢献する」の「貢献する」という言葉が良いなと思った。自分たちを認めてもらえるというのが、そのまま自分たちの自信につながるという意味では、「貢献する」という言葉はとても良いなと思った。

G氏：教室で基礎的なことを学んで、次に総合的なところを地域に出て行って力を発揮する。そして足りなかったところを振り返って教室で学び直しをするという

繰り返しになると思う。実際にこのように地域に出掛けて行って何か活動をするというのは、先生方にとってはかなりの労力ではないかなと思う。施設でも地域とのつながりということで、外出するなどの計画を立てるのだが、日常の建物の中とは違った支援が必要な場面が増える。他にも安全対策とかいろいろな配慮が必要となる部分が多くなるので、それを実践していくとなると、大変な労力になるので、実践している学校には感心する。将来のことを考えて、子供たちに力を付けていかなければならないということをよく考えて活動していただいているのがよく分かった。地域に出て行って新しい体験をさせ、学びを深めてもらい、振り返りで評価につなげるという、地域との連携、いわば総合学習という面が本当に大切な取り組みだ。

F氏:特別支援学校の生徒と、少しずつつながることができて本当にうれしい。公民館清掃をしてもらっているが、生徒を見ていると、リーダーはリーダーの役割をしっかりと務めている。チームワークもよい。与えられた役割を果たしている。学校の外に出て行って活動するという事は、生徒さんにとって本当に大切なことだと思う。

(イ) その他 なし

イ 報告

(ア) 令和6年度学校評価アンケート実施計画について

(資料 p. 4-9)

担当副校長：本校が地域に開かれた特色ある学校づくりをより一層進めていけるよう、今年度の学校評価を実施する。対象は本校職員、中学部・高等部の生徒、小中高の全保護者様の3つとした。実はアンケート実施期間は終了している。しかし、今年度は回収率が良くない。特に保護者様については、50%を少し越えたところだ。よって、信頼性、妥当性を高めるために、再度アンケートのお願いをする予定。調査方法は、生徒はアンケート用紙、職員はMicrosoft Formsのアンケート機能を利用、保護者様はFormsとアンケート用紙の併用とする。「てしろもりの丘」入所生については、保護者様に回答できるよう取り組んだ。学校評価の目的は、実態を明らかにするだけではない。結果に基づいて学校運営の改善を図ることにある。次の第3回学校運営協議会で結果を報告する。浮き彫りになった課題について、家庭や地域の協力を得ながら改善できる可能性があるものはないのか、委員の皆様からご意見をいただきたい。

(イ) 令和6年度いじめアンケート実施計画について

資料のとおり（担当副校長が説明）

- ・いじめの定義の確認
- ・本校の取り組み状況（11月22日現在のいじめ認知は19件）
- ・学校いじめ防止基本方針の改定部分の説明
- ・アンケート結果は次回の学校運営協議会で報告すること

(ウ) 学校全体行事等について

（総括教務主任が説明）

- ・学校へ行こう週間について

9月11～15日の5日間実施。対象は、盛岡市、八幡平市、矢巾町、紫波町の小中学校、特別支援学校、小学部1年生が通っていた保育園、幼稚園。参加数は、5日間で88名。（昨年度は74名）

- ・「ひがしの日」について

11月2日（土）に実施。コロナ明け、人数制限なしで実施した2回目。来校者は406名。昨年度よりも増加。内容は、小学部は音楽発表、中学部・高等部は作業製品の販売。初めての試みとして、別日に開会セレモニーを開催し、他の学部の発表内容を共有した。地域連携の前期の取り組みのまとめをスロープの壁に掲示した。お帰りの際にご覧になっていただきたい。

- ・放課後等デイサービス職員向けの学校見学について

「学校に行こう週間」や授業参観の時に、保護者さんだけではなく、放課後等デイサービスの皆さんからも見学したいというお声は頂いていた。さらに、第1回学校運営協議会の時にもご提言があったことも踏まえて計画した。12月13日～15日の3日間、午前中に実施予定だ。案内している対象は、本校の児童生徒が平日利用している放課後等デイサービスの職員さんということにした。すでに申込は締め切っている。3日間で合計79名の依頼があった。学校の様子も見ていただきたいと考えている。

ウ その他（全体の感想等）

B氏：盛岡ひがし支援学校の「学校いじめ防止基本方針」の内容が素晴らしく、勉強させていただいた。日常的にいじめは起きるものだという捉えはあるが、いじめに該当する事例を示してもらって分かりやすかった。よかれと思ってしたことも、場合によってはいじめになる。いじめという言葉を出すのではなく、心に迫った対応をしていくということが非常に素晴らしい。いじめ防止基本方針の早期発見、早期対応は、中学校でも同様に取り組んでいるが、未然防止の取り組みの中の、今回書き加えたという「児童生徒に培う力とその取り組み」の（5）の部分は、中学

校の取り組みにはおそらく無い部分だ。教職員の指導という項目はある。児童生徒に培う力とその取り組みというところは、非常に大事な視点が盛り込まれている。見習いたいと思う。

C氏：いじめについて、加害者・被害者どちらにも障がいがあると、ものの見方や捉え方や感じ方が違う。いじめ対応の進め方が一般的な方法とは違うと思われる。いじめたつもりがなくても、明らかにいじめていたり、いじめたつもりがなくても、いじめになってしまったりなど、非常に対応が難しいのだろうと思う。うちの施設の生徒もたくさん迷惑を掛けているのだろうと思う。いじめに該当する事例を見せてもらったが、これをいじめと呼ぶということになると、対応がとても難しいのだろうと思う。いじめの対応については、見つけたらすぐに対応するのか、何度か同じようなことがあったら会議等にかけて対応していくのか、何か段階など規準があるのか。

担当副校長：普段から友人同士のトラブルがあるので、その都度、教師から指導をする。大事なことは、関わる職員がそのトラブル等について知っていて、生徒同士を、気を付けて見ていくこと。それが生徒にとって一番のセーフティーネットになる。まずは情報共有し、生徒に合った指導をしていく。その中でいじめとして認知される案件の場合は、しかるべき様式を使って聞き取り等をし、会議にかけて認知し、県に報告していく。

I氏：常に子供たちを見ながら判断する。C氏が言うように、生徒の実態によって関わり方は変わる。日々の学校生活の指導の中で、いじめと疑われる状態を見かけたところで、その都度教員の側から声を掛け指導をする。小さなことでも常に情報共有していくことの積み重ねの中で、加害者・被害者の状況をしっかり確認し、必要な場合にはいじめ認知の枠の中に入るのか否か検証し、枠の中に入る場合はいじめと認知し、指導していく流れである。昔のいじめのイメージと、現代のいじめの定義は全く違う。その全く違った視点で、日々児童生徒をよく見ていかなければならないという点については、職員に日頃から周知している。

C氏：保護者への連絡の基準やタイミングにきまりはあるか？

担当副校長：特にない。普段から情報共有をしている。保護者には「いじめ」の捉え方について情報提供し、いじめの定義の啓発に努めている。「いじめ」という言葉を使わずに対応するケースもたくさんあるが、あったことは必ず保護者に伝わるようになっている。

D氏：小中高だとどの学部がいじめが多いなど、傾向はあるか？ どんないじめがあるのか、内容を教えてほしい。

担当副校長：本校では、高等部が多い。言葉での攻撃のほか、間違っただ言葉選び、言葉の使い方が目立つ。難しいケースでは、生徒を別室に移し、考える時間を設けるなど必要な対応をしている。ほとんどのケースはコミュニケーションの指導である。

(4) 委員から

A氏：先ほども述べたが、今の学習指導要領が平成28年からのものであることから、もう間もなくまた新学習指導要領の改訂がある。いろいろ少し話は聞いているが、やはり知的教科の、合わせた指導とか、いろいろな指導場面でしっかり教科の目標、内容をしっかりと意識をして指導しなければいけないということだ。従来のように先に中身や活動があって、いつもと同じようにしているというようなことはもう難しくなるということだ。私は是非、今日ご報告いただいた地域連携については、これから子供たちにとっても本当に大切な学習になっていると思うので、先生の方が、この活動で子供たちにどんな力が付いたのかというところはしっかりと意識をしていただいて、取り組みを発展させていただければと思う。どうぞよろしくお願ひしたい。

B氏：本校には学校運営協議会がまだない。だいたい素案はできていて、これから創立80周年に向けてつくっていくことになる。ひがし支援学校さんはじめ、県立高校ではすでにつくられている。これからつくるという意味で、学校運営協議会の資料は大変参考になる。また今日は「いじめ」の問題について、先ほども発言したが、いじめ防止基本方針がとても参考になる。良い部分を本校の職員にもち帰って共有したい。未然防止の大切さがきちんと基本方針に盛り込まれているところは大変勉強になった。

C氏：時代が変わってきて、本当に先生たちもいろいろなことを頑張らないとまらない時代になっていて、ストレスも多いのだろうなと思ひながらも、本当にいろいろ頑張っただいて、生徒たちが生活できているかなと思ひている。感謝している。今日質問したいと思ひしたのは、不登校のことだ。こちらの支援学校の対応でもよいし、一般的な支援学校が決めている対応でもよいし、普通の学校がどこまでどう決めているか、一言二言で言えることではないと思ひますが、基本的な考え方とか対応についてだ。支援学校の場合はどう対応しているのか。教えてほしい。と、思ひしたのは、普通の学校であれば、生徒さんが行く行かないを自分で決めて通学すると思ひう。

生徒自身の意思が大きいのだと思うが、支援学校さんの場合は、どうしても親が送ってくる、親が連れて帰るということになるので、そうすると、本人の意思だけではないのだろうし、親御さんと学校との関係もあった時に、先生たちがどういう考えに基づいてどう行動するのかなど。ご家族はご家族で、どういう考えで対応するかなどというところが、学校の考えと、うまくフィットすればよいのだろうが、フィットしなかった場合は、基本的にはどのように考え、対応するのかというのを教えてほしい。

I氏：基本的に不登校の場合は「こうする」というような、例えば、こういう学習内容で、こういうふうに対応していく、というのは本校のケースの場合、特に形としてあるものではない。例えば、支援学校に入学する前の、小学校、中学校の時に不登校だった、不登校気味だという生徒ももちろんいる。例えば、進級して少し環境が変わったら、少し行きづらさが強くなったかなという子供たちもいる。よって、ケース・バイ・ケースの対応が基本だ。それぞれの学部の子供たちの実態に応じて、柔軟に対応してるというのが現実的な部分だ。保護者さんとの連携という点では、無理に学校に来させてください、来させないと困るなど、そういうやりとりはない。まずは、子供さんが学校に向かえる気持ちを維持するように、少しでも学校に向かう気持ちを大きくしていくような取り組みで、それぞれの学部が対応しているところだ。具体的には、朝から帰りまで下校時間まで学校で過ごすというのがなかなか苦痛だというケースがあるのだとすれば、登校時間の調整であるとか、あるいは外部の福祉サービスさんとの連携などを探ることもある。また、学校という学びの場と生活の場が協力して対応するなど、学校だけで対応しないという場合もある。いずれケース・バイ・ケースで、関係機関とも連携しながら、柔軟に取り組んでいくということにはなるかと思う。高等部の例だと、小・中とずっと不登校だったとしても、支援学校の高等部に来てから登校が始まるというパターンもある。よって刺激を強くしないようにしながら徐々に3年間かけてというようならいの、長期スパンで見えていく対応もしている。関係機関との連携というと、生活の安定を図るために必要な場合は、福祉のほかにも、例えば医療関係とも連携するとか、親御さんとの連携を探ったりする。他との連携がなく、家庭の中で完結してきたような事例であれば、将来どう家庭の外へ広げていくか考える時に、支援会議を設定するなどしている。支援学校として関わった以上は、生活の土台作りも同時進行で進めていく必要があり取り組んでいる。

C氏：今日聞いてみたくなった理由が2つある。1つは、入所の相談があったケースが、たまたま立て続けに不登校気味の生徒だった。もしかして、そういう時代な

のかなとか思いながら、今入所することになった場合、教育との関係、どういう形にしていくのが理想になるのかなというのを少し考えたというのと、もう 1 つの理由は、放課後等デイサービスの関係だ。今年、福祉の方は報酬改定といって 3 年に 1 回あるものだが、利用料金が変わるというのがあった。その中で、放課後等デイサービスについては、以前は 1 日単位で料金が一定だったが、今年から時間単位になった。このぐらい利用すればこの金額だよというふうに、時間単位になったということと、それに合わせて、個別支援計画に、この人は何時から何時まで利用する人だということを書きなさいという指示が入った。ということはイコール、その時間必要な職員数は何人だから、それをきちんと確保してるかということ、市役所さんから確かめられる場合がある。不登校の児童生徒は、以前であれば、「営業時間であればいつでも連れてきててもよいですよ」と言えたのだが、今度からは「今、受け入れの体制取ってないです」となる場合があり、いままでのように「お願いします」、「わかりました」と簡単には言えない状態になっている。「今日はこの予定で職員を配置してます、してません」が出てくるので、受け入れに難しさが出てきたなというのもあって、学校での指導はどういう感じが聞いておきたかった。

D 氏：先ほど、学校評価アンケートの部分で、保護者からのアンケートの回収率が 50%ということだったが、個人的に思うのは、保護者に対してのアンケートを「携帯でも回答は OK です」、「質問用紙への回答でも OK です」としてあるが「紙だと担任の先生に回答内容が分かるよなあ」、「携帯だと誰が見て把握してるのかな」などということが気になって、回答を流してる人もいるのかなと思う。私はしっかり携帯で回答した。

E 氏：先ほども少し話したが、本当に毎年毎年活動されてる姿を見てきたが非常に今日感激した。先生方の頑張りが形となって見えている。来年もますます頑張っていたきたいなと思っている。

F 氏：先生方はいじめ問題で大変だなという感想をもちながら話を聞かせていただいた。いじめの捉え方は、年齢やそれまでのその人の経験で、いろいろ受け止め方に違いが出てくると思う。ぜひとも先生方全員が、問題に対して同じ解釈の仕方をして、いじめ問題に対応していただけるよう頑張っていたきたいなと思って話をお聞きした。それからもう 1 つ、いじめについて、現段階で 19 件の認知報告をしたという話だが、その内容についても全て、小学部、中学部関係なく、皆さんで共有できてればよいのかなと思って話をお聞きした。

G 氏：学校ではいじめが問題になるが、施設だと利用者への虐待防止という問題

がある。利用者間のトラブルで、いじめに該当するような事案は施設でもある。学校で取り組んでこの地域連携の中では、よく「マナーが～」というようなところが随所に出てくるが、マナーを個々に理解しながら力をつけていけば、いじめは変わっていく。事例報告も、少しずつ減っていくのかなという感じがある。施設の利用者同士のトラブルについても、社会的なルールやマナーから外れていじめに発展していくようなケースが多々見られる。地域に出て行って、いろいろなマナーを学んでくるというのは、いじめ防止にもすごく繋がってるのかなという気持ちでいる。地域に出て行って、いろいろなマナーを学ぶということは本当に大事なところだと、施設側でも考えている。

H氏：まずこの地域連携活動についてはしっかりと取り組まれているのが、報告の中で明らかになったと思う。引き続き工夫をしていただきながら、活動を継続いただければよいと思う。いじめ関係については、非常に難しい。この事例で「いじめ」と言われると、どうしたらよいのだろうと、非常に衝撃を受けた。先生方の苦労が大変だろうと感じた。次に先ほど話題に出た放課後等デイサービスの報酬改定の件については、国の基準ということで、盛岡市の独自の基準というわけではない。来年10月から就労選択支援がスタートすることになっている。まだ国の方から正式な通知等がない段階で、はっきりとは言えないが、支援学校さんから卒業して福祉サービスに繋がるような方々が、この就労選択支援というサービスを必ず間に挟む流れになりそうな感じだ。その辺りの情報は入り次第、学校さんの方にも、改めて情報提供していきたいと思う。よろしく願いたい。

I氏：本日はたくさんのご意見を頂戴した。本当に感謝している。本校の地域連携は、まだ途中ではある。地域連携の基本的な部分は、本校の教育活動を知ってもらうということ、それから気に留めてもらうこと、そしてその上で見守ってもらって、また具体的に何か発展をしていくというような部分を大切にしていきたい。地域連携を深めていくことが、その上で大事であると考えている。我々教育に携わるものは、子供たちの社会参加や社会自立をどうイメージし、日々の学習活動に繋げていくかということについて、改めて思いを新たにし、日々の授業を大事にしていきたいと思う。学校から発信していくのだという姿勢を、我々教職員が共有しながら、そしてまた地域の方々に支えていただきながら、今後も進めていきたいと思っている。本日は、本当に貴重な時間を、お越しいただき、ご意見等多数頂戴した。本当にありがとうございました。

(5) 閉会のことば